の、本つ御國の大御光を輝さむと爲るに、既く此方の古人たち、其扶桑と云ふを、皇國の漢名と爲して、詩賦文章の類にも往々用ひ、○註略また歌文の集、紀事の書の名にも負せたるを、近世の學者たちは、其を非と論へるも許多あり、然れど此は古人の、皇國に當たるが實に叶ひて、其を非と云へる後人の論ぞ、却りて非には有ける、○下略

〔元元集一本朝造化篇〕或書曰、日本國者自大唐而所名也、斯國自大唐東方萬餘里、居于東極、日出東方、昇于扶桑、已近日所出、故云日本也、仍又號扶桑國也、

〔豫章記〕夫吾朝日本秋津洲豐葦原中津國者、大洋海之東、扶桑州也、

〔夫木和歌抄三十六跋〕此夫木和歌抄者、藤原朝臣長清自撰也、○中略此鈔之名を思案して、少しまどろみて有ける夢の中に、白衣之老翁一人來曰、○中略倭國之風俗なれば、扶桑集と可名付と謂れけるを、○中略此由を冷泉黃門爲相卿に被申ければ、爲相卿○中略扶桑者日本國總名也、可有其憚、扶之字之つくり桑之字之木を取合て、夫木和歌抄と名付、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年七月甲申朔、正四位下粟田朝臣眞人自唐國至、初至唐時、有人來問曰、何處使人、答曰、日本國使、○中略唐人謂我使曰、丞聞、海東有大倭國、謂之君子國、人民豐樂、禮義敦行、今看使人儀容大淨、豈不信乎、語畢而去、

君子國

〔山海經九海外東經〕君子國在其人國○大北、衣冠帶劒食獸、使二大虎在旁、其人好讓不爭、有薰華草、朝生夕死、一曰在肝榆之尸北、

阿每鄕

〔和爾雅一地理〕日本國異名

ヤアパン

阿每鄕按續三綱行實、稱日本謂、杏杏滄波阿每鄕、是據于隋書所謂日本國王姓阿每之說、

〔采覽異言三細亞〕ヤアパン　日本

國在東方極界、赤道已北三十一度、至三十八度、其地東西長而南北狹、四時平而風氣和、眞壽國也、